

アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：ひゃくえむ

あらすじ

小学生のトガシは生まれながらにして足が速く、周囲から一目置かれる存在であったが、走ることに楽しさや意味も見出せずにいた。ある日、何の取り柄もなく内向的な少年・小宮と出会う。小宮は「現実より辛いことをすれば現実がぼやけるから」と、遅いながらも死に物狂いで走る少年であった。トガシは小宮に「100mを誰よりも速く走れば全部解決する」と語り、二人は互いの存在を通じて走ることを見出し始める。しかし二人の関係は、小宮の突然の転校によって断ち切られてしまう。

高校に入り走ることをやめていたトガシと、記録だけを追い求め自らを研ぎ澄ませていった小宮。それぞれ異なる道を歩んだ二人は、インターハイの決勝で再会する。しかしその再会は、二人にとって思いがけないものとなった。

さらに10年の歳月が流れる。走る意味を見失ったトガシと、記録の世界に閉じこもる小宮。二人はそれぞれの苦悩を抱えながら、日本選手権の舞台で三たび巡り合う。100メートル。横一線に並び、一斉にスタートする。そのわずか10秒余りの中で、二人は走ることに、そして生きることに向き合うことになる。

本作は、100メートルを走るという行為を通じて「なぜ走るのか」という問いが繰り返して投げかけられている。そしてその問いは、やがて「なぜ生きるのか」という実存的な問いへと深まっていく。勝敗や記録の向こう側にあるもの——生きることを、走ることの中に見出そうとする人々の姿を描いた作品である。

今回のテーマ

I. スポーツアニメの変遷とひゃくむ

II. 子ども時代のトガシと小宮の交流について考える

III. 高校時代のトガシと小宮について考える

IV. 現実逃避と潜在空間——あれから 10 年

V. ガチになること——極上の 10 秒

VI. まとめ

I. スポーツアニメの変遷と『ひゃくえむ。』の特異性

1. スポーツアニメの古典：【父性の導きと成長】

- 代表作: 『エースをねらえ!』『巨人の星』
- 構造: 有能な指導者（父性的権威）による過酷な導き。
- テーマ: * 師弟関係という垂直的な軸での成熟。
 - 孤独に耐え、一人の「個」として強く自立すること（「コートではひとりきり」）。
- 時代背景: 高度経済成長期。「上からの正解」に歯を食いしばって応える美德。

2. 現代的スポーツアニメ:【母性の抱えと水平の躍動】

- 代表作: 『ハイキュー!!』
- 構造: チームという共同体（母性的な器）による「抱え（Holding）Winnicott」。
- テーマ: * 安心感の中で個々が花開く、水平的な軸での自己実現。
 - 「いかに生き生きとプレーするか」というプロセスの重視。
- 時代背景: 現代。強い父性よりも、共感と支え合いの中で主体的になる感覚。

3. 『ひゃくえむ。』:【実存的な問いと裸の個】

- 構造: * 100m 走の特性: コーチの介入もチームの援護もない「空白の 10 秒」。
 - 父性の導きも母性の抱えも機能しない、究極の孤独。
 - 問いの質の転換:
 - 従来: 「いかに強くなるか」「いかに輝くか」(成長と勝利の物語)。
 - 本作: 「なぜ走るのか (=なぜ生きるのか)」(実存の物語)。
 - 作品の核心:
 - 「勝てばすべて解決する」というテーゼの無効化。
 - 勝敗の彼方で、剥き出しの個として「生きる意味」を掴み取る試み。
-

図解: スポーツアニメにおける「生」の座標軸

作品	心理的土壌	主な問い	救いの形
エースをねらえ!	父性の導き	いかに強くなるか	師による承認と自立
ハイキュー!!	母性の抱え	いかに躍動する	チームとの一体感

作品	心理的土壌	主な問い	救いの形
		か	
ひゃくえむ。	裸の実存	なぜ生きるのか	絶望の先にある意味

II. 子ども時代のトガシと小宮：母の法のフィールドにおける交流

1) 登場人物紹介：対照的な二人の「閉じた走り」

項目	トガシ（天賦の才）	小宮（渴望する凡才）
心の状態	「空虚」：主体的な選択がない	「情念」：強い対人緊張と自信のなさ
走る意味	周囲の評価の中にただ「いる」だけ	現実の辛さを麻痺させるための自己処方
アイデンティティ	速さを剥がすと「何も残らない」恐怖	痛みで痛みを打ち消す自傷的行為
走りの質	他者に開かれていない「退屈な速さ」	他者に開かれていない「孤独な苦痛」

2) ジュリエット・ミッチェルの理論：水平軸の「母の法」

- 「父の法」（ラカン）との対比
 - 父の法：権威的、垂直的な関係（親子）。導きと禁止。
 - 母の法：きょうだい関係、水平的な関係。対等な存在との葛藤。
- 同胞殺害幻想（fratricidal fantasy）
 - 母を独占したい幼児（toddler）が、後から来た「赤ちゃん（他者）」を排除・抹殺したいと願う本能的な衝動。

- 母の法の本質：喪失の受容
 - 単なる禁止ではなく、**「排除したい相手と共に生きること」**を自ら引き受ける痛み。
 - 「以前の母子密着には戻れない」という喪失を認め、対等な他者を受け入れること。

3) 母の法のフィールドとしての「100m 走」と決別

- 水平な舞台（100m 走の特性）
 - 横一線、同時スタート、特権なし = 「母の法」そのものの構造。
 - 他者が介在することで、二人の「閉じた走り」が「共にある営み」へ変化し始める。
- きょうだいトラウマの発生
 - トガシ：小宮の台頭に「排除したい（殺害幻想）」を抱くと同時に、走る意味を初めて見出す。
 - 小宮：トガシを超えることは、憧れの対象を「殺す」ことであり、走る意味の破壊に繋がらうる。
- 突然の断絶と後遺症
 - トガシの呪縛：「思考の万能感」により、小宮の転校を「自分の殺害願望の成就」と誤認。強烈な罪悪感と空虚へ。
 - 小宮の身体化：トガシを超えること（殺害）への無意識の恐怖が、怪我への過剰な不安として現れる。
- 「大人の入口」としての言葉
 - テーゼ：「100m を速く走れば全部解決する」
 - 主体性の要請：「それを決めるのは君だよ」
 - 二人の共鳴：この言葉は小宮への「父的な導き」であると同時に、トガシ自身が自分に言い聞かせた「主体性確立へのエール」でもあった。

Ⅲ. 高校時代のトガシと小宮：潜在空間と父性的対象の相克

1) 登場人物紹介：主人公たちを揺り動かす「他者」

氏名	役割・象徴	トガシ/小宮への影響
浅草 葵	「抱える環境」	トガシの「速さ」ではなく「存在」を求め、再び走る契機を与える。
仁神 タケル	「父の法の犠牲者」	偉大な父の影に潰されていたが、トガシとの「遊び」を通じて走る喜びを取り戻す。
経田	「迫害的な父性」	小宮の才能を恐れ、否定する。小宮が幼少期に受けた拒絶の反復。
財津	「理想的な父性」	小宮の才能を見抜き、金言を与える。導きを与えるが「抱え」ではない。

2) ウィニコットの「潜在空間 (potential space)」

- 定義： 内的な「空想」と外的な「現実」の間にある**「第三の領域」**。
- 本質： * 子どもの「遊び」のように、現実根ざしながらも自由な体験に没頭すること。
 - 人が「本当の意味で自分自身 (True Self)」でいられる場所。
- 成立条件： 安心して遊べる**「抱える環境 (holding environment)」**の存在。
 - 赤ちゃんが母親に抱かれるような、絶対的な安全感が必要。

3) 潜在空間の萌芽 (トガシ) vs 父性的世界 (小宮)

- トガシ：【抱えによる「遊び」の獲得】
 - 浅草葵による変容： 結果を問わない「抱え」により、トガシの中に潜在空間が誕生。
 - 「遊び」としての走り： 走ることが誰かの期待に応えるためではなく、無心の没頭 (遊び) へ昇華。
 - 仁神への伝播： 「勝ち負け (父の法)」を超えた走る喜びを、一緒に走ることとで仁神に伝える。
- 小宮：【垂直な関係と「自己愛的な殻」】
 - 父性的対象の連鎖： 理想 (トガシ・財津) と迫害 (経田) という、常に「上下」の垂直関係に身を置く。
 - 欠落した母性： 導きはあるが「抱え」がないため、潜在空間が生まれず「遊

び」の質が宿らない。

- **防衛の精緻化**：孤独を埋めるため「確率・計算・記録」という知的な壁を築き、他者に対して閉じたまま走る。

4) 再会と「処理されなかった喪失」の重さ

- **雨の中の再会**：
 - インターハイ決勝。晴れ舞台ではなく「雨」というシチュエーションが、未処理の悲哀（喪失）を暗示する。
- **理想の崩壊と空虚な勝利**：
 - **小宮の失望**：「走り方、変わったね」。追いつけてきた「父性的理想としてのトガシ」が消失。
 - **テーゼの揺らぎ**：勝ったにもかかわらず満たされない。「速ければすべて解決する」という信念が崩壊し始める。
- **結論**：
 - トガシは「抱え」によって過去の空虚から抜け出しつつある。
 - 小宮は勝利してもなお、理想を失い、深い孤独と実存的な問いに取り残される。

IV. 現実逃避と潜在空間——あれから 10 年

1) 登場人物紹介：過去の影と現在の現実

氏名	役割・象徴	影響
樺木	「過去の証人」	全盛期のトガシを知る後輩。「変わった」という言葉でトガシを揺さぶる。
海堂	「現実逃避の哲学者」	万年 2 位の現実を知り尽くした上で、潜在空間を言語化し、トガシを導く。
森川	「外部の期待」	トガシに憧れる後輩。トガシに「誰かのために走る」という外的な理由を与える。

2) 「変わった」という言葉の反復と偽りの成熟

- **10年後のトガシ：【抑うつポジションの仮面】**
 - 万能感を手放し、現実を受け入れた「成熟した大人」に見える。
 - しかし、その実態は「走る意味」を失った**諦めと停滞**。
- **言葉の反復：**
 - 10年前の小宮の失望 = 現在の樺木の落胆。
 - 「変わった」という指摘が、穏やかな日常の下に埋めていたトガシの「火」を再燃させる。

3) 海堂の言葉と「潜在空間」の言語化

- **海堂の哲学：【目を見開いた現実逃避】**
 - 現実（勝てない、老いる）を完全に認知した上で、なお「次こそ勝つ」と信じる。
 - **潜在空間の体現：**「棒切れが剣ではないと知りつつ、剣として遊ぶ」子どものように、現実と空想の間の「第三の領域」に生きる。
- **「自己への期待」としての逃避：**
 - 現実逃避 = 「俺が俺を諦めていない」という**姿勢・使命**。
 - 葵との間にあった「遊び（潜在空間）」の感覚が、海堂の言葉によって初めて論理的に言語化される。

4) 潜在空間なき「目を塞いだ立ち止まり」

- **トガシの誤り：【外部に依存した意味】**
 - 「誰かのために(森川のために)走る」 = 意味を自分の外側に置く危うさ。
- **海堂の警告：**
 - **目を見開いて逃げる：** 現実を直視し、その上で否定・超越する（創造的逃避）。
 - **目を塞いで立ち止まる：** 現実を直視できず、適当な理由で自分を誤魔化す（停滞）。
- **潜在空間の崩壊と涙：**
 - 肉離れという残酷な現実を前に、子どもたちへ語った「負けてもいい」という達観。
 - それは自分への嘘であり、**号泣**はトガシの中に「本気（直視すべき現実）」がまだ死んでいない証左。

5) 「あの一瞬のために」——仁神との対話による覚醒

- **仁神の変化：【エディプスからの解放】**
 - 父の重圧を脱し、「あの一瞬のためなら人生を棒に振れる」という潜在空間の極致へ到達。
- **トガシの決断：【死んでいた10年からの脱却】**
 - 「明日生きるために死んでいた（意味なき継続）」自分を自覚。
 - 「昨日までの続きを生きるくらいなら、今、全力で走れなくなります」
 - = 未来の安定（明日）を捨てて、今この瞬間の潜在空間（ガチの遊び）に命を懸けるといふ、真の現実逃避（自己への期待）の始まり。

V. ガチになること——極上の10秒

1) 財津と小宮の再会——世代交代と遺された言葉

- **世代交代の儀式：**
 - 理想的父性（財津）を子が超えていく「エディプス的な父親殺し」の構図。
- **絶対王者の遺言：**
 - **記録の孤独：** 頂点（1位）から見える景色は、最下位と同じ孤独である。
 - **歓喜の所在：** 真の喜びは記録やメダルではなく、**「対等な対戦相手」**との競り合いの中にのみ存在する。
- **小宮の拒絶：** 「垂直な目標（記録）」に固執する小宮には、まだ「水平な共感（相手との歓喜）」という真実を受け入れる器がない。

2) 準決勝——海堂の到達と小宮の衝撃

- **準決勝の衝撃：** 無名の海堂が、記録を追う小宮と絶対王者・財津を抜き去る。
- **「対話」としての走り：**
 - 海堂は記録を目指したのではない。15年間、財津という「横にいる相手」と走り続けてきた。
 - **結論：** 「自分を諦めない期待（潜在空間）」を生き続けた走りが、計算と対策に閉じこもった小宮の自己愛的な殻を打ち砕いた。

3) トガシと小宮——「ガチになること」

- **小宮の崩壊と吐露**：記録で負けたことで「何のために走るのか」という虚無に直面し、トガシに弱さをさらけ出す。
- **トガシの変容**：かつての「見上げる対象（父性）」から、挫折を経て復活した「対等な存在（きょうだい）」として小宮の前に立つ。
- **「ガチ」の再定義**：
 - **ニヒリズムの超克**：世界に意味や連帯がなくても、**「本気でいることの幸福感」**だけは何ものにも奪えない。
 - **テーゼの再提示**：「100m 速ければ全部解決する」。かつては父的な「命令」だった言葉を、今は共に遊ぶための「誘い」として手渡す。

4) 決勝——100メートルの潜在空間

- **原点回帰**：号砲とともに、二人の姿は小学生時代のあどけない姿へと還っていく。
- **勝敗の消失**：どちらが勝ったかは描かれない。
 - **理由**：答えは「誰が速いか」ではなく、共にガチになり、世界がきらめいた「その瞬間」の中にあるから。
- **母の法の完成**：排除したい相手（きょうだい）と共に走り、その一瞬を共有する「極上の10秒」＝潜在空間の完成。

VI. まとめ

- **三作品の比較による『ひゃくえむ。』の特異性**
 1. 『エースをねらえ!』【父性・垂直】：指導者の導きで「強く」なる。
 2. 『ハイキュー!!』【母性・水平】：チームの抱えで「生き生き」する。
 3. 『ひゃくえむ。』【実存・裸の個】：孤独と現実を知り抜いた上で、**「なぜ生きるのか」**に向き合い、ガチになることの中に意味を見出す。
- **結論**：父性の導きも母性の抱えも引き受けたその先で、きょうだいと共に「人生のすべてを10秒に詰め込む」。それが本作が辿り着いた、生きる意味の極致である。

